

位置と環境

遺跡は大口市と出水市の境の朝日岳の麓、標高約580mの丘陵の頂上付近のやや平坦な部分に位置する。南側約200mの傾斜地には湧水が湧く沢があり、東側と南側に開けた地形である。

今回の発掘調査区は丘陵頂上の端からやや奥まった平坦部に位置し、東側の丘陵の先端までは約200mの距離がある。

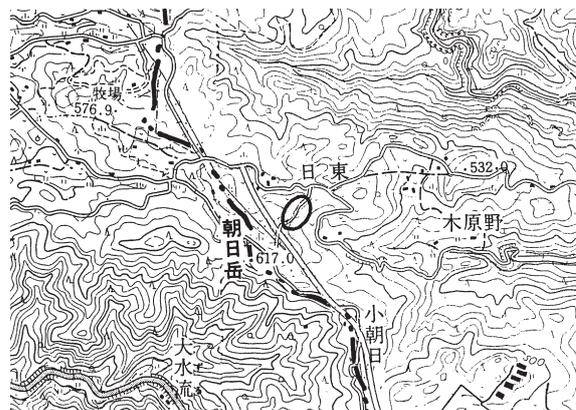
遺跡が所在する日東地区周辺の上場高原一帯は旧石器時代の遺跡が豊富な地区、発掘調査が実施された日東遺跡や、出水市の上場遺跡、水俣市の石飛遺跡など著名な遺跡が所在している。

調査の経緯

大口市から菱刈町・栗野町に至る広域営農団地農道整備事業が計画されたことに伴い、大口市教育委員会が調査主体となって、平成8年度に確認調査、平成9年度に本調査(2000㎡)を実施した。

遺構と遺物

調査では、旧石器時代の遺物、縄文時代早期の遺構と遺物が発見された。旧石器時代の出土遺物は、ナイフ形石器を主体として、台形石器、三稜尖頭器、削器・搔器、敲石、二次加工のある不定型石器、使用痕剥片などで構成されている(第2図)。出土遺物の中で最も充実しているのが、ナイフ形石器であり、総数は石器組成の中で全体の半分を占めており形状と刃潰し加工の部位によってI類～III類に分類した。I類は石器の二側縁に刃潰し加工が観察されるものであり、形状は両側縁がやや丸みを持った寸詰まりの柳葉形を基本としている。II類は石器の基部両側に局部的に刃潰し加工が見られ、側縁全面に加工が及ばず、形状は木葉形を基本としている。III類は石器の一側にも刃潰し加工がみられるものである。ナイフ形石器に次いでやや小型の三稜尖頭器が出土した。石器の約2割を占めている遺跡の特色として剥片尖頭器が含まれない特徴があり、ナイフ形石器と台形石器、三稜尖頭器を主体とした文化と言える。今回の発掘現場からは、旧石器時代の遺構は発見さ



第1図 小原野遺跡の位置

れていない。熱を受け赤変した礫や礫群なども確認されなかったが、自然遺物と捉えた礫塊は、発掘作業が困難になるほど多数出土した。自然礫と捉えたものはすべて基盤層と同様の輝石安山岩で、周辺の山からの転石であると判断した。

縄文時代の遺物は、撚糸文土器、押型文土器、塞ノ神式土器、条痕文土器といった縄文時代早期に相当するものであり、石器等も出土数は少なかったが石鏃、石斧、石匙等がそれらに伴うかたちで出土した(第3図)。縄文時代の遺構は、集石遺構1基のみであった。出土地点は縄文時代の遺物分布の中心と重なっており、また検出面も縄文時代早期の遺物の包含層であることから縄文時代早期の集石遺構であることが推察される。集石は大小18個の円礫や角礫を組み合わせ構成されており、石はいずれも焼けていた。その礫の範囲は長軸65cm、短軸45cmの楕円形を呈していた。なお掘り込みは確認できなかった。

特徴

黒曜石の原産地に隣接することが挙げられる。直線距離で約1kmの距離に日東黒曜石原産地があり、現在も黒曜石を採集できる露頭がある。

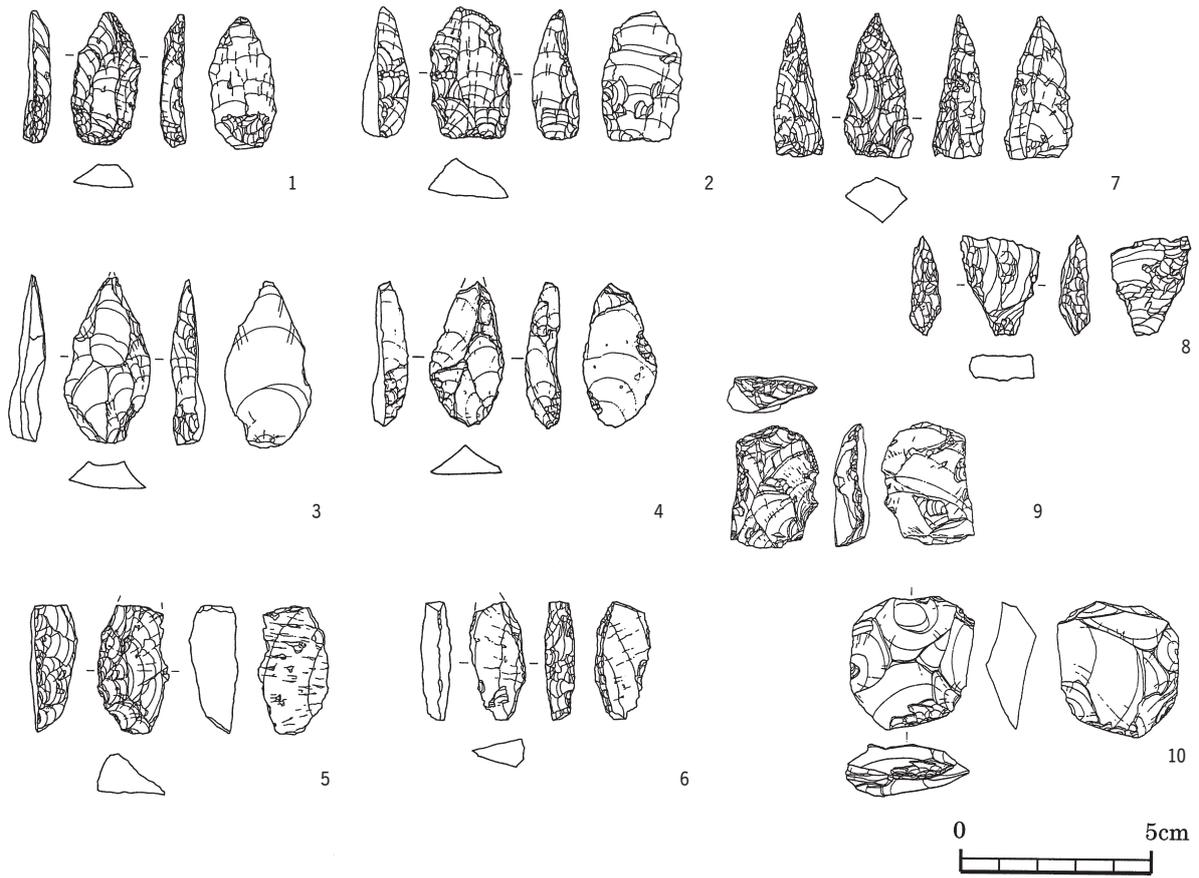
資料の所在

出土遺物は、大口市教育委員会に保管されている。

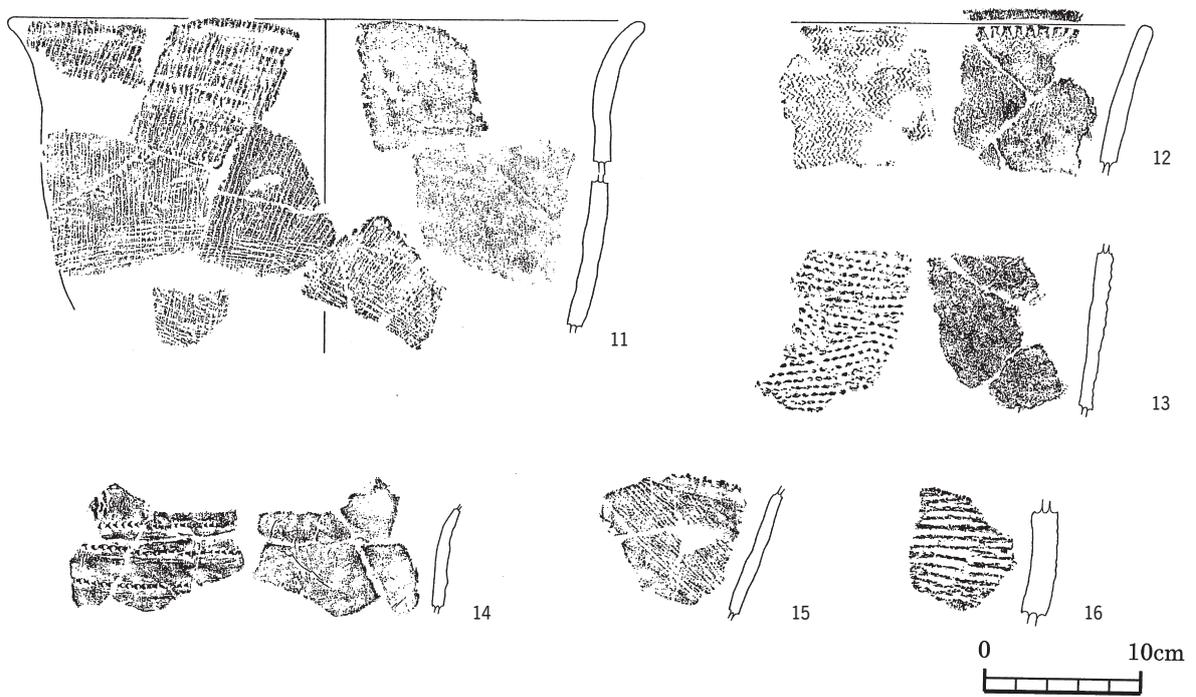
参考文献

大口市教育委員会1999「小原野遺跡」『大口市埋蔵文化財発掘調査報告書』21

(柿川幸司)



第2図 旧石器時代出土遺物



第3図 縄文時代出土遺物